

〔学界動向〕

「讃岐国山田郡田図の世界」をたずねて

麻野 絵里佳

去る一九九三年一月二十三日(土)・二十四日(日)の二日間になつて、香川県高松市において、『讃岐国山田郡田図の世界』古代弘福寺領調査シンポジウム』が、高松市教育委員会の主催で行われた。このシンポジウムは、高松市多和文庫に伝わる国指定重要文化財の「弘福寺領讃岐国山田郡田図」とその比定地周辺の発掘調査事業に伴うものである。

一九八六年度から一九九一年度までの六年間の調査研究成果のまとめであり、現地見学会・各調査報告・記念講演は、いずれもハイレベルで、古代の荘園絵図研究史上に残る充実したものであった。

筆者は、調査委員の一員である東京大学史料編纂所教授石上英一氏が、同大学文学部において行われていた、山田郡田図に関する講義を聴講させていた。その熱意あふれる講義に刺激され、このシンポジウムにも参加することにした。そこで本稿において、実際現地へ赴いて見聞したことを、自分なりの意見・感想を添えて以下に紹介してみたいと思う。

○第一日目(山田郡田図関連遺跡現地見学会)

集合が早朝であったにもかかわらず、予定より多めの参加者が集まっていた。市教育委員会が、現地見学会参加者を募る広告を出したところ、即日定員一杯になってしまったという。当日の朝のテレビローカルニュースでも、この見学会のことを放映していたし、常時二、三台のTVカメラが同行していた。高松市民の、地域の歴史や文化に対する関心の高さを物語る一面である。

また、主催者側の、研究者と一般市民の双方に配慮した心遣いも、いたるところに見られた。例えば、配布された資料に、発掘調査報告書からの転載図というような、一般には馴染みの薄いものを載せる一方で、平易な文章での説明を添えることも忘れてはいなかった。そのうえ、移動中のバスのなか、及び現地へ到着してからの、調査委員の先生方の補足説明も、基礎的な部分から、かなり専門的な部分にまで持ち上げてゆくようななされ方であった。しかも、その中には先生方の頭の中にあるだけで、まだ論文化されていない、新鮮な見解も含まれていた。第一線の研究者の着眼点や発想の方法、ひいては人間性にも直に触れることができたのは、有意義であったと思う。

見学のコースについては、田図に描かれた場所以外にも、当該期の地

域社会を考える上で、重要な地点も多く組み込まれていた。広い視野をもって、様々な角度から見つめ直すという、今回のシンポジウムの趣旨は、このようなところにも反映されていたのである。

まず、初めの見学地は、讃岐一宮田村神社であった。田村神社は、田図に見える山田郡・香川郡の郡境地帯を実態的に支配していたと考えられる、秦氏の本拠地で、戦国時代まで秦氏が代々宮司を務めていた。この神社の最大の特徴は、古代の南海道が、神社の境内を東西に突き抜けているところにある。現在では、すぐ隣の別当寺大宝院につながることから、「両参りの道」と呼ばれているようである。また、江戸時代の南海道も、ここから南に丁度一町ずれたところがあり、こちらの方は、神社の鳥居の前を横切る一般道路となっている。各時代を通じての、交通の要所であったことに疑いはない。



写真①「香東川」

次に、香川町大野にある香東川の分岐点へ向かった。田図には、水路や井戸の存在が示されているため、古代の水利環境を知ること重要と考える。高松平野は、讃岐山脈から瀬戸内海へ向かって流れる数本の河川による堆積の集合体で、なかでも香東川によって形成された扇状地は最大規模のものである。古代の水利環境検討の前提として、現代の水利体系を把握することも必要だが、そ

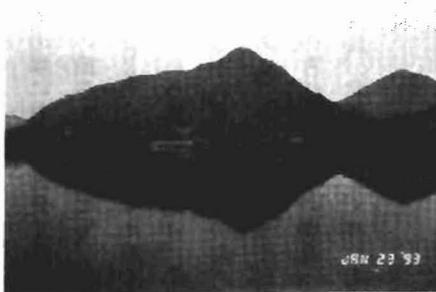


写真②「大禹謨」

ちにして満水となり、想像もできないような姿に変貌するらしい。

香東川のような、河川によって作られた扇状地には、浅い開析谷が走っている。加えて、温暖で降水量が少ないという瀬戸内地方独特の気候のためか、高松平野には、その開析谷を堰き止めて築造された溜池が多く見られる。三谷町で見学した三郎池も、県下有数規模の溜池である。田図北部比定地は、地形上は西南からの香東川扇状地水脈に依存するはずであるが、近世初頭に三郎池が増

の骨格は、近世前期の西嶋八兵衛を中心とした水利事業によって完成させられたという。彼が香東川改修工事完成を記念してこの地に建てた「大禹謨（だいうぼ）」の石碑（現在ここにおかれているものは、その複製）を見てから、川原へと下りていった。目の前に横たわる香東川は、水量が少なく、とても豊かな水源とはいえないように見えたが、地元の人話によると、雨が降ればたちま



写真③「三郎池」



写真④「加摩羅神社」

築されてからは、こちらへの依存が強まったという。

因みに、三谷町には、南海道の「三溪駅」に比定される地がある。それは、加摩羅神社、及び大庄屋漆原邸の付近ではないかと推定されている。その加摩羅神社では、古墳の石室に使われたと思われる石が、小さな祠の台石となって祀られていた。

三谷の地を後にし、東植田町にある下司廃寺跡に到着した。東植田は、

山田郡条里の南限である。下司廃寺跡からは、白鳳期の弘福寺式の瓦や埴仏が多数出土している。白鳳期は、ちょうど山田郡に弘福寺の所領が設定された時期にあたり、田図比定地から離れてはいるものの、この地域への弘福寺の強い支配力を感じることができる。

また、この塔基壇には、現在、吉光神社の小祠があり、その前に古瓦が数点並べてあった。この見学会に同行していた富山大学の宇野隆夫氏（考古学）が、瓦の裏面に残っていた布の綴目跡、



写真⑤「下司廃寺跡」

及び表面の縄模様より、白鳳期と奈良時代の弘福寺式の瓦であることを確認された。さらに実際瓦を手に取り、その場において即興で講義して下さった。これらの瓦によって、目立たない細やかな部分にも、都の技術はしっかりと伝わっていたことが知られるという。予期せぬ嬉しいハプニングに恵まれ、一同は色めき立った。これら貴重な古瓦は、その場で、市教育委員の手によって回収され、保管されることとなった。

いよいよ山田郡田図現在比定地の見学である。かつては、山田郡田図の現地比定には二説あったが、今回の一連の古代弘福寺領の調査・研究によって、南部は高松市林町の空港跡地遺跡、北部は同じく林町の大池付近に比定すべきであることが確認された。

まず初めに、南部比定地に赴いた。ここは、戦時中、陸軍飛行場が建設され、数年前まで、高松空港として利用されてきた地である。当初、飛行場建設により、遺構が破壊されていることが懸念されたが、堅いコンクリートに守られて、かえって遺りは良好であったそうである。発掘調査では、弥生時代の竪穴住居や、田図の時代の水田跡、及び坪界線とおぼしき溝まで確認されている。また、山田郡と香川郡の郡界線に比定される線上では、非常に幅広い畦畔が検出された。更に、現存はしないが、古代より近代に到るまでは南部比定地の東側に存在していた、吉国寺と岩田神社は、弘福寺所領の経営と何らかの関わりをもつ施設ではないかと考えられているということである。

最後に、北部比定地の一部にあたる、大池東南隅を訪れた。ここは、寺領の中心的な施設である「三宅」や「倉」、「井」等があったとされる地点である。われわれが訪れた時には埋め戻され、影も形もなくなつて

いたが、ほんの数日前までは、ちょうど田図に示されたあたりに、本当に井戸が存在していたそうである。この井戸が、まさか田図の時代から続いていたとは思われないが、この地点が、かなり古くから水源として重要視されてきた事実を示す一つの傍証とはなり得るだろう。更に、田図によれば、この周りには「佐布田」、すなわち、旧河道を利用した水田が存在したことになっており、低湿地帯であったことが示されている。そしてこのことは、微地形分析の結果とも一致し、発掘調査でも水田に關わる遺構や、条里坪界線が確認されている。田図上の表現と、実際の調査結果は、見事なまでに合致しているのである。

現地見学会全体を振り返ってみると、僅かながらも遺された一つ一つの小さな事実は、確実に、古代地域社会の状況と、現在に到るまでの変遷の過程の一端を再現してくれる材料となっていた。だが、その一方で、田図比定地のみならず、今回見学コースに含まれていた遺跡は、どこも住宅や工場に近接しており、古い時代の趣を感じることは、徐々に難しくなってきた。開発の波に押されて、古代を再現する材料の多くは、かなり急速に姿を消しつつあるのが現状なのである。少しでも早く、まだ古い時代の景観や遺構が残っている間に、実際に現地へ赴き、調査・研究を進めなくてはならない必要性に迫られていると感じた。

○第二日目〔シンポジウム〕

シンポジウムは、真新しい高松市図書館の視聴覚ホールにおいて行われた。開会の挨拶の後、流出した山田郡田図を郷土に買い戻した松岡

調の子孫で、現在多和文庫を管理されている、松岡弘泰氏の御挨拶があった。氏は、先祖から受け継がれてきたものを守る責任の重さと、困難さを力説されていた。身近に原史料を持たない身としては、ただ羨ましい限りであるとはかり思っていたが、そのために日常生活が制限されてしまうことも多く、われわれが気付かないところで、かなり御苦労されていることを知った。管理者の負担を少しでも軽くするために、あらゆる面において、研究者並びに公共機関の助力が必要であると思う。

また、今回のシンポジウムでは、山田郡田図の美しいカラー写真が掲載されたパンフレットが配られた。この写真は、従来公開されているものとは比すべくもないくらい鮮明である。この後の調査報告において、石上氏が指摘されていた田図の彩色の相違のうち、茶褐色と赤褐色という、普通の写真ではなかなか判別が難しいものについても、明らかにその違いを知ることができる。かなりの高感度カメラを用いて、新たに撮影されたものと聞く。この撮影も含めたシンポジウムの進行全般にわたって、松岡氏の御理解と御協力は勿論のこと、調査委員・関係諸氏との信頼関係も不可欠であったと推察する。この場を借りて、御尽力賜った方々に御礼申し上げたい。

シンポジウム午前の部は、それぞれの分野の専門家五名によって、山田郡田図の調査並びに研究の成果についての報告がなされた。

まず、実際に発掘を担当された山本英之氏からは、スライドを用いて、大池東南隅の地点を中心とした発掘成果の報告がなされた。条里遺構の分布・地形及び土地利用と、田図の記載事実との照合から、この地点が、田図北部比定地としての可能性が高いという見解を示された。

高橋学氏は、過去の土地利用について検討するためには、それぞれの時代の自然環境、すなわち人々が、どのようなところで生活していたかを復原することが不可欠であるとの視点から、微地形環境分析という手法を用いて、高松平野の地形環境の変遷について説明された。これは、僅かな土地の状況の変化の積み重なりを、丹念に調べあげ、考えてゆく方法である。氏の報告によると、高松平野は、弥生時代から古代までに、何度も水田が再開発されており、条里型土地割は、扇状地帯の微起伏が埋積し、平坦になった時に行われたもので、その後段丘化が起きたという。その上、地下水位が低下したために、灌漑用水の確保が必要となり、香東川や旧河道の出水の利用、更には溜池の築造に着手する一方で、島作への切り換えも行われたとされた。

石上英一氏は、史料そのものの作成や移管の理由、及び伝来の過程を辿ることは、関係諸機関の歴史そのものを解明することに繋がるという視点から、まず、山田郡田図の成立と伝来の歴史的背景を説明された。田図の原本は、天平七年（七三五）の班田の際に、弘福寺寺家により作成された寺領図であるが、現存本は、十一世紀後半から十二世紀初頭に模写されたものである。この時期は、九世紀以降、東寺の勢力下におかれつつあった弘福寺所領の、東寺長者政所による復興が試みられた時期にあたる。田図写本も、その資料として弘福寺寺家で作成され、他の弘福寺文書とともに東寺長者政所に送られ、伝えられたというのである。更に氏は、田図を史料学的に分析し、田図に描かれた寺領の構造についての見解を述べられた。田図は、扇状地の旧河道という立地と共に、その立地のもとでの開発の進行、及び集落・荘家を含めた、寺領荘園の

人為的・自然的景観をも具体的に示しているという。

金田章裕氏は、条里呼称法が、この田図には見えていないことに注目され、田図が示す天平七年当時では、これはまだ成立してはいなかったとの視点から論を展開された。条里呼称法とは、各郡ごとに条・里及び里の中の坪につけた番号で、その土地を表現する方法である。このような条里呼称法は、条里地割と共に、従来は、七世紀半ばには実施されていた、班田収授と直結する概念をもつ「条里制」と一括して捉えられてきた。そこで、氏は、班田収授と無関係に存在する条里地割と条里呼称法からなる土地表示システムを、「条里プラン」と呼び、所謂「条里制」とは区別して考えることを提唱された。そして、その「条里プラン」が讃岐国において完成され、使用されるようになったのは、天平宝字六年（七六二）頃であると結論づけられた。

更に、田図の記載と実際の発掘状況を照らし合わせた結果として、田図は、各区画毎に登録・記録されている状況をもとに、おおよその分布を示すという、独特の記載方法によって描かれていることも報告された。当初は、以上四名の方々の報告のみの予定であったが、当日急遽、外山秀一氏によって、花粉とプラントオパール分析の結果も発表された。花粉、及びプラントオパール分析とは、その土中に含まれる花粉、プラントオパールの種類や検出量を分析することにより、そこが、いつ何をどのように栽培していた土地であるかを調べる方法である。この結果によつて、より一層具体的な土地利用状況を知ることができよう。氏の見解によれば、これらの分析による調査結果と田図上の表現は、ほぼ一致していたということであった。

どの報告も、スライドや写真等を豊富に用いて、具体例を指し示しながら行われ、一般の人々にも配慮したわかりやすいものであった。筆者にとっては、馴染みのない方法での調査報告もあり、一つ一つの専門用語の概念を含めて、どこまで理解しきれたか、甚だ心許ない気はするが、かえって新鮮でもあり、非常に刺激をうけたことは確かである。また、当然のことかもしれないが、このように様々な手法による調査結果の導き出す結論が、基本的には全て一致していることに、改めて感銘をうけた。これは、各々の学問分野の科学性や客観性を証明すると同時に、自分の専門分野以外の報告にも耳を傾けることの重要性を示すものだと思う。異なった視点から見つめ直すことによつて、より冷静に、自らの正當性や誤りを認識することが可能だからである。

午後は、足利健亮氏の「八世紀の南海道とその周辺」をテーマとした記念講演から始まった。足利氏は、道の屈折点と郡界との交点は、全国的傾向として一致しないことから、道と郡界は、あくまでも実態においてのみ関係があったとして、両者を、制度的にも関連づけて捉えた金田氏の説を批判された。金田氏御自身もその場におられたため、お二人の白熱した議論が展開されることを期待したが、そのための時間が割かれなかったのは残念であった。

次の記念講演は、狩野久氏による「史跡保存と荘園研究」と題されたものであった。氏は、御自身の経験と立場から、史跡保存と荘園研究に対する思いを語られた。例えば地名は、本来は何か意味があつてつけられたものであるから、それを残すということは、実体として存在する遺跡保存同様重要であることを強調されていた。荘園絵図には、様々な由

来を想像させる地名が残されている場合が少なくない。そのような地名の研究に、絵図や田図を利用し、研究成果として残してゆくのも、史跡保存の一環であるということであろう。

記念講演の後、討論の時間が設けられてはいたが、コメンテーターからの調査報告に対する意見を除いては、ほとんど、聴講者からの質疑応答にのみ終始した感はぬぐいきれない。これは、短い時間に対し、あまりに中味の濃い企画だったので、そのしわ寄せができてしまったということなのかもしれない。次回以降の検討材料としていただきたい。

以上が、『讃岐国山田郡田図の世界―古代弘福寺領調査シンポジウム』の概略である。筆者の力不足により、間違っているところや、言い及ばなかったところは多々あるが、失礼の段はお許しいただきたい。なお今回のシンポジウムの基礎となつている、「弘福寺領山田郡田図関係調査事業」の調査報告書が、高松市教育委員会より出されている（同委員会編『讃岐国弘福寺領の調査―弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書―』一九九二年三月）。本稿も、この書に拠るところが大きいので、是非とも参照されたい。

本シンポジウム、及び関連事業の成果に対して、コメンテーターの原永遠氏が、「まるで、初めて月から石を持って帰ってきたようだ。」という感想を述べられたのは、まことに印象的であった。今までは、ただ遠くから眺めているだけだった月から、石を持って帰ることにより、わからなかったことの多くが解決されたが、その反面、わからないということすら気付かなかった新たな疑問が、山のように湧いてきたという

ことである。学問上の疑問というのは、どんなに小さなものであっても、一夜のうちに解決するということはない。悠久の時をかけるつもりで、地道に研究を重ねてゆくことが、結局一番早くて確実であるとは、常々感じてはいるが、いざ実行となると、なかなか難しいものである。

つい先日、本シンポジウムに参加した東京大学の大学院生によって、その報告会を兼ねた、荘園絵図・田図の研究会が開かれた。規模は小さいながら、スライドや原寸大の手製の田図を使つての報告は聞きごたえがあった。本稿執筆にあたり、参考とさせていただいた点も少なくない。若い研究者を、このような形で触発したという事実だけをとってみても、本シンポジウムは意義深いものがあつたといえよう。

(あさの・えりか 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程)